

# 保健学科だより

徳島大学医学部

School of Health Sciences, Tokushima University

第17号 2017年6月

## 巻頭言

徳島大学医学部保健学科長  
雄 西 智恵美

人々のニーズに対応した安全で安心できる医療を提供するためには、専門性の高い知識・技術力、多職種と連携・協働できる協調性、さらには倫理観と責任感を基盤にした人間性に溢れた人材が求められています。徳島大学医学部保健学科は、このような医療人としての使命感を有する人材養成のために、平成13年10月に設置されました。また、平成18年には、保健科学教育部博士前期課程（修士課程）、平成20年4月には博士後期課程が設置されています。学科から博士前期・後期課程まで一貫した教育体制が整ったなかで、幅広い教養と豊かな人間性を基盤として、保健学の高度な専門性と実践的な臨床能力を兼ね備えた人材育成をめざしています。

保健学科には、看護学専攻、放射線技術科学専攻、検査技術科学専攻の3専攻があり、看護師、保健師（選択）、診療放射線技師、臨床検査技師の国家試験受験資格、また選択により養護教諭一種免許状や遺伝子分析科学認定士試験受験資格が得られます。カリキュラムは、各専門の知識・技術を修得する科目だけでなく、医療人としての基本的姿勢を養う科目を設定しています。また、保健学科のある蔵本キャンパスは、医学部、歯学部、薬学部の3学部があり、この特徴を生かした他学部・学科と連携して基礎教育からチーム医療マインドを育む教育を実施しています。高度医療が展開されている大学病院が隣接していることも強みであり、教育的連携のなかで臨床現場のリアリティを身近に感じながらより実際的な教育を推進しています。さらに、グローバルな視野から保健医療を探求し、多様な価値観を養うことも重点化しています。現在は、ネイティブな教授によるInternational Nursing Basic Courseの開講やフロリダ・アトランティック大学（米国）とメトロポリタ応用科学大学（フィンランド）との学生交流、セントポール大学（フィリピン）の語学研修プログラムを進め

ています。

一方、大学院は、生涯健康支援学領域（前期課程：看護学領域）、医用情報科学領域、医用検査学領域の3つの領域があり、教育・研究者の育成はもとより、助産実践コースや養護教諭（専修免許状）、あるいは専門看護師や医学物理士などの高度医療専門職者を養成するカリキュラムを構築しています。基礎教育課程にある学生にとっては、資格取得だけがゴールではなく、自分の将来像をイメージし、キャリアをどのように積み重ねていくのか、大事な関心事項です。学科—大学院が一貫した体制のなかで、高い志をもって社会に貢献できる医療人として自己研鑽していく姿勢を養ってほしいと考えています。

今日そして将来を見据えた保健学のあり方を創造しつつ、医療や教育、研究の第一線で活躍できる人材の育成をめざして一同努力を重ねていきたいと思っておりますので、今後ともご支援、ご協力よろしく申し上げます。

## 目次

巻頭言	page:1
特集	2
研究紹介	5
1. 看護師による発症直後から脳卒中患者に対する片麻痺の運動支援	
2. 臨床に適合した被ばく線量測定手法の開発	
3. 研究室だより	
教務委員会だより	6
学生委員会だより	7
新任教員紹介	8
国家試験合格状況	8
インフォメーション	8

## ■ 保健学科・保健科学教育部の国際化の取り組み

保健科学教育部 教授

谷岡 哲也

保健科学教育部 准教授

岡久 玲子

保健学科および保健科学教育部では国際的な教育・研究環境の改善に取り組んでいます。まず、全米トップ50にランクされているフロリダ・アトランティック大学 (FAU) とは、教育・研究に関する交流を促進しており、FAUの名誉教授でもある保健科学教育部のロクシン教授が国際交流をリードしています。

平成7年に大学間学術交流協定(総合科学部, 工学部)を締結し, 平成9年頃から医療技術短期大学部(後の医学部保健学科)との交流も始まり成果を上げてきました。この国際交流は, 長篠博文名誉教授および多田敏子名誉教授によって始まりました。FAUへの留学経験のある長篠名誉教授がFAUとの最初の交流を取り持ってくれました。FAUは全米でも有名な, 看護におけるケアリングの研究を行っている大学です。『ケアリングとしての看護』の執筆者であるFAUのアン・ボイキン元学部長との交流が, 多田名誉教授のご尽力により始まりました。

その後, FAUからマーリン・パーカー教授, ロザーノ・ロクシン教授が, 徳島大学に来学し, 教員間の国際交流と学部学生の交流が盛んに行われ

ています。平成23年には, 谷岡教授が客員研究員としてFAUに滞在し, ロクシン教授やベス・キング助教らと国際共同研究を開始しています。平成26年にはFAUからロクシン名誉教授を本学教授に迎え保健科学教育部の国際化の体制が整備されました。

次に, 平成22年に徳島大学歯学部とヘルシンキメトロポリア応用科学大学 (MUAS) 歯学部との間で部局間協定が締結されました。

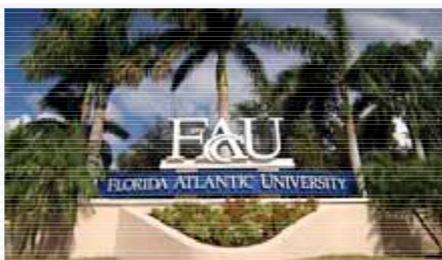
MUASは, かねてから看護学の分野でも本学と交流を促進したいとの希望を持っていたことから, 平成23年に徳島大学医学部とMUAS保健看護学部との間で, 部局間協定を締結しました。MUASとの交流は, 徳島大学歯学部口腔保健学科の伊賀弘

起教授の仲介で, 多田名誉教授を中心に開始されました。

多田名誉教授の退職後は, 岡



授業でのプレゼンテーション (MUAS)



平成23年9月, FAUのキャンパス, 入学式にて  
(左から谷岡教授, ジャン・ロー教授, ロクシン教授)



MUASのあるフィンランドの風景  
(ヘルシンキ大聖堂, スオメンリンナ島)

久准教授が引き継いでいます。

MUASでは毎年約90国籍の外国人留学生900人が学び、フィンランドで最も国際的な大学として知られています。医療・福祉分野の高度専門職医療人の養成に力を注ぎ、学士・修士課程の教育では英語で行われています。これまでに、MUASより本学に7名の留学生を受け入れ、本学からは毎年8～9月の約40日間、2～5名の学生を派遣しました。現地の学生や様々な国からの留学生と、共に英語で看護に関する科目等を受講し、保健センター、病院、福祉施設等の施設見学も行います。英語での授業はディスカッション形式が多く、文化交流はコミュニケーション能力の向上につながっています。

平成28年にタイのプリンス・オブ・ソンクラーク大学（PSU）と交流協定を交わしました。PSUは、地域社会のニーズに合わせたさまざまな教育プログラムを提供する5つのキャンパスがあります。39の学部、研究所、4つの病院、40以上の研究センターで構成されています。PSUは、平成15年以降、主要業績評価指標（KPI）などの戦略を立て、研究指向の大学を目指しています。また研究基金であるDisciplines of Excellenceを設立し、研究ミッションに基づいて大学院の研究プログラムを設計しています。これらの成果としてPSUは、2016 QS (Quacquarelli Symonds) ランキングにおいて、タイで8位、アジアで185位にランクされています。

平成26年には、ロクシン教授、安原准教授、谷岡教授がPSUを訪問し、共同研



PSUのキャンパス



究、教員・院生との意見交換会を行いました。また、PSUの大学院の看護の国際コース（修士課程、博士課程）において、徳島大学の紹介を行いました。

平成27年には、PSU看護学部長のアラーニャ・チャオワリット博士らが徳島大学に來学し、教員との意見交換、徳島大学と大学病院の見学を行いました。

平成28年には、ワラポン・コングスワン博士（副学部長・国際交流担当）が來学し、「日本とタイにおけるICU看護師によって認識される看護におけるケアリングとしての技術的な能力」に関する共同研究を行い、本学の学生に対するケアリングとしての看護の授業も行いました。

加えて、平成28年には、フィリピンで多くのキャンパスを有するセントポール大学フィリピン（SPUP）と交流協定を交わしました。



SPUPのキャンパス内の教会

SPUPは、アジアで最初のカトリックの大学であり、フィリピンの高等教育委員会（CHED）によりASEAN学生のためのプログラムに参加する12の学校のうちの1つに指定されています。またSPUPは、アジア、ヨーロッパ、オーストラリアの大学との国際的連携とパートナーシップを拡大し



平成28年、SPUPにて（左からシスター・メルセディタス・アングSPUP、近藤和也教授・岸田教授・谷岡教授・ロクシン教授）

ています。その結果、SPUPは、国際理解、平和、異文化間対話、持続可能な発展、そして質の高い教育への支援のために、ユネスコ・アソシエート・スクール・プロジェクト・ネットワークの関連団体として認識されています。

加えて、SPUPでは、谷岡教授とロクシン教授が大学院博士後期課程 PhD in Nursingの客員教授として講義を行っています。また、The 3rd SPUP International Health CongressのKeynoteおよびEnd noteスピーカーとして講演もしています。

平成29年度から、保健・医療職としての英語でのコミュニケーション能力の強化のために、SPUPで学部学生を対象とした短期語学留学が開始されます。

国際交流を続けていくために、岸田看護学専攻

主任のリードにより看護学講座国際交流委員会を立ち上げ、近藤和也前学科長のリーダーシップの下、保健学科および保健科学教育部グローバル化委員会を発展的に組織し、運営しています。また、学部教育では、国際医療・国際看護の授業を、そして大学院教育では、国際医療実践英語演習という授業を、ロクシン教授と谷岡教授を中心に行っています。

国際交流で重要なことは、「国際的な人と人のつながり」をどのように作っていくかということです。国が変わっても、信頼関係という人間関係は、普遍のものです。

これからも国際医療に貢献できる医療人、教育者、研究者を育成できる環境を作っていきたいと思えます。



## 特集 2

### ■ 平成28年度保健学科SIH道場での取り組み

看護学専攻  
千葉進一

徳島大学では、新入生全員が大学での学修の基盤となる知識、技能、態度を身につけ、アクティブラーニングが実践できるために、「鉄は熱いうちに打て：Strike while the Iron is Hot (SIH)」の精神に則り、SIH道場を実施している。今回は、平成28年度に看護学専攻で実施したワークショップ「大学生としてのマナーや態度を題材としたプレゼンテーション能力等の育成」について紹介する。目的は、医療人としてのマナーや姿勢、態度について、事例を通し他の学生と情報を共有し自分の考えを深めることであった。学生間でディスカッション、プレゼンテーション計画、資料作成、発表を行い、ルーブリック評価を実施した。教員は、学生に「あなたが当事者ならどう対応するか」と問いかけ、アクティブラーニングを促した。実施後の学生のアンケートから目的は概ね達成できていたが、改善点として、グループワークの時間確保や、多くの学生が意見を言える環境作りなどが必要であった。

放射線技術科学専攻  
森田明典

放射線技術科学専攻では、新入生40名を対象とし、新入生研修、短期研究室体験、6月期SIH道場、

並びにチーム医療入門ワークショップを実施した。専攻独自のカリキュラムである短期研究室体験では、各教員が主宰する研究室テーマに配属学生が取り組み、研究指導を通して文章力およびプレゼンテーション能力の向上を図るとともに、協働作業を体験させることで課題解決のための協働力の重要性を認識させることを目的とした。6月期SIH道場では、短期研究室体験報告会での発表を想定し、「パワーポイント」を用いて、発表演習を行った。9月末の短期研究室体験報告会は、全員参加形式の口頭発表とし、発表内容の評価は担当教員中心に行った。体験学生へのアンケートでは、文章力、協働力、プレゼン力等の汎用的技能の修得だけでなく、大学における今後の学習への興味を高める動機付けとしての評価が高く、早期体験型授業としての有効性が確認できた。

検査技術科学専攻  
細井英司

検査技術科学専攻では、新入生17名を対象として早期体験授業〔①先輩からのメッセージ(目的：各自の将来像について考える)、②保健学科新入生研修くワークショップ>(目的：ラーニングスキルの獲得)、③大学院のすすめ(目的：将来像の一つの選択肢として大学院進学を考える)、④チーム医療入門(目的：文章力、協働力、プレゼン力の獲得)]を実施し、自身の専門分野である臨床検査学や臨床検査における先端研究への興味関心を喚起し、大学での学修・研究に対する動機づけを行っ

た。平成28年度のSIH道場では、学修の基本となる文章の書き方、協働力、プレゼンテーションや振り返りの仕方などを学び、それらを実践することで、大学における能動的な学習の基本となる知

識、技能、態度を身につけることを目的とした。平成29年度は、時間割に割り振ったSIH道場の授業時間を有効に使い、ゆとりをもった早期体験授業などを実施する予定である。



## 研究紹介

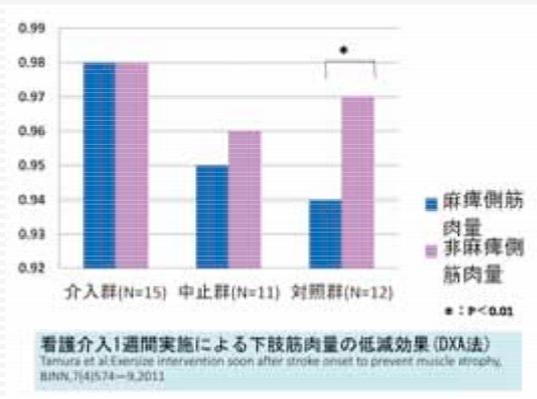
### 1. 看護師による発症直後から脳卒中患者に対する片麻痺の運動支援

看護学専攻  
田村綾子

近年、脳卒中による死亡率は減少傾向にあって、我が国においては死亡原因の第4位です。しかし、脳卒中で機能障害を残しながら療養する患者数は、123万人（平成28年）で30年前から全く減少しておらず、特に要介護5（ほぼ寝たきり）者の原因疾患の第1位は脳卒中（33.8%・平成25年）です。ほぼ寝たきりで介護が必要ということは、患者のみならず家族を悩ます非常に重大な問題です。脳卒中の発症予防や早期治療・看護と並行して、脳卒中発症後の寝たきり予防のための支援方法や提供体制を整えたいと研究を進めています。

一般的に、脳卒中後の後遺症に対しリハビリテーションが有効な期間は、発症後4～6か月の間とされています。特に3か月目ぐらいまでは急速に回復するため、従来からの理学療法士や作業療法士による専門的なかわりに加え、看護師による発症直後から脳卒中患者に対する片麻痺の運動支援について研究を行っています。具体的には、下肢の活動については発症直後からの麻痺側

と非麻痺側ともに使用する臥床腰上げ運動を行うこと、上肢については南川貴子准教授が新しく考案した清潔動作を組み込む活動です。評価は、下肢はDXA (Dual Energy X-Ray Absorptiometry) 法を用いて下肢筋肉量の低下を予防することがRCT研究で明らかにでき、上肢は、活動範囲の拡大という確認ができました。その成果は、British Journal of Neuroscience Nursingに投稿し、採択されました。2編とも研究内容を示すイラストが投稿雑誌の表紙を飾ることができました。今後は、急性期のみならず回復期での有効性の確認や精選に取り組みたいと考えています。



### 2. 臨床に適合した被ばく線量測定手法の開発

放射線技術科学専攻  
林裕晃

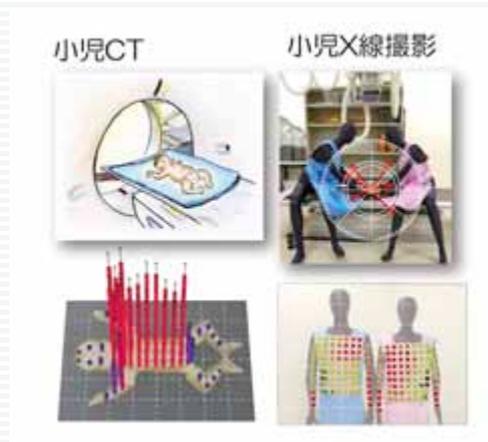
単純X線検査やCT検査で得られる画像情報は医療において必要不可欠です。質の高い医用画像を得るためには、多量のX線を人体に照射しなければなりません。被ばくの増大という弊害を生みます。そこで、画質を担保しつつ、被ばく線量を下げることが必要となりますが、現在の医療現場では被ばく線量は測定されておらず、人体模型などを用いた推定実験によって装置の出力を管理しています。我々の研究グループでは、実臨床に

用しやすい被ばく線量計を長瀬ランダウア株式会社と共同開発しており、患者や医療スタッフ個人の被ばく線量を直接測定するシステムを整備することを目指しています。

図の左側に示した「新生児CT撮影」の例では、新生児ファントムの表面に多数の線量計を添付し、胸腹部のCT検査を受けたときの線量分布を可視化しています。開発している線量計は、X線が直接照射される部位だけでなく、水晶体や生殖腺などの散乱X線に起因する被ばくも適切に測定できるという特徴を有します。右側の例は、小児単純X線撮影における「介助者」の被ばくを可視化したものです。散乱X線によって不均質に被ばくしていることが一目瞭然です。これらの可視化され

た情報は、放射線防護を考える上で役立ちます。

医療装置の発展は目覚しく、様々な技術が診断・治療に応用されていますが、診断用X線に対する物理学の基本は変わっていません。偉大な先人が定式化してくれた物理学を道具として、産業と医療の学際領域の研究を新たに開拓し、現代医療の発展に貢献したいと考えています。



### 3. 研究室だより

#### 検査技術科学専攻 遠藤逸朗

みなさんはじめまして。このたび生体機能解析学分野の教授に就任いたしました、遠藤逸朗と申します。旧来の所属分野である、血液・内分泌代謝内科学分野で行っておりました研究を引き続き継続させていただきますので、この場を借りてその内容を紹介させていただければと思います。

当研究室では、遺伝子改変マウスを用いてホルモンやサイトカイン異常と内分泌・代謝疾患および骨代謝疾患の関連を検討するとともに、糖尿病や高血圧、肥満、メタボリック症候群や動脈硬化に関する臨床研究を行っています。現在進行中の

研究としては、藤井節郎記念医科学センター特任教授、福本誠二先生とともに抗骨粗鬆症かつ抗メタボリックシンドロームの治療標的たり得る可能性を秘めたinterleukin-11に関する検討、そして、耐糖能異常の治療標的としてのCa感受受容体に関する検討を主に遺伝子改変マウスを用いて検討しています。さらに、糖尿病臨床・研究開発センター長の松久宗英教授がマネージメント、あるいは日本糖尿病学会より依頼を受けて当院で行っている糖尿病臨床研究や全国調査などのお手伝いもさせていただきます。

引き続き、上記のような基礎研究および臨床研究の両輪で研究を進めていきたいと考えています。今後ともよろしくご依頼申し上げます。

## 教務委員会だより

#### 教務委員長 吉永哲哉

##### ●学修に関する調査と改善

教育改善を目的として、徳島大学「第4回 学生の学修に関する実態調査」を昨年（平成28年）末、全学生を対象に実施し、冊子「ラーニングライフ」として報告書にまとめています。以下、保健学科学生に対する調査結果の一部を紹介します。

大学教育に対し、学生の多くは「社会に出たときに役立つ知識」や「資格取得に必要な知識」が得られることに期待し、大学で獲得を期待する知識・能力は、第一に、「専門的知識」とし、次に、「コミュニケーション能力」と「一般知識・教養」を挙げており、専門的学問だけでなく、汎用的技

能の修得に期待していることがわかります。授業時間外の学修は「宿題が出たときのみ」(50%)、「興味のある科目や分からない科目を自主的に」(35%)と答えた学生が多く、自主的に予習・復習を行っている学生の割合が、前回調査の3年前と比べて約10%高くなっています。保健学科では、平成25年度から、幅広い学修の促進を目的として、専門性を志向した学修方法を入学時に提示し、将来像をイメージした「学修設計」の立案を指導しています。学修計画に沿った学修ができるよう継続的に指導と支援を行っており、取り組みの浸透結果が現れ始めていると考えられます。

高校で履修しなかった科目（数学、物理、化学、生物）のために、大学での学修に支障を感じた科目が「ある」と答えたのは、看護学専攻24%、放

放射線技術科学専攻18%, 検査技術科学専攻73%であり, 専攻間で差がみられます。看護学専攻では「化学」と「物理」, 検査技術科学専攻では「物理」の学修が特に不足していると感じています。自然科学入門の受講やリメディアル教材の学修を個別に勧める指導が必要です。一方, 放射線技術科学専攻では前回調査で不足を感じる科目として挙げられていた「生物」が今回の調査では支障ないとの回答で, 変化がみられます。1年次開講科目「基礎生物学」の時間割配置を前期に移動させ, 高大接続を意識した授業内容の実施に基づき, 問題が解消したと考えられます。

英語を毎日または定期的に学習している学生の割合は20%でした。また, 留学を体験または予定している学生は, 看護学専攻19名, 放射線技術科学専攻7名, 検査技術科学専攻2名で, 増加している傾向があるのは好ましいことです。

報告書の全内容は, 徳島大学ウェブページ「学生の学修に関する実態調査」([http://www.tokushima-u.ac.jp/campus/life\\_survey/gakushujittaichosa.html](http://www.tokushima-u.ac.jp/campus/life_survey/gakushujittaichosa.html)) から閲覧できます。

#### ●とくしま元気印イノベーション教育プログラム

文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」として, 徳島大学では「とくしま元気印イノベーション人材育成プログ

ラム」を推進しています。平成28年度以降に入学した学生において, 「地域志向科目」を含めて20単位以上を取得した学生には, 学長から県内就職に有効な修了証が交付されます。教養教育においては, 地域に関する基礎的知識の理解を深め, 保健学科の専門教育では, まず, 健康問題の変遷や健康課題を理解し, 地域で生活する人々の健康を支援するために病院・行政・学校・産業・在宅でどのような支援活動が行われているのかを学びます。さらに, 保健学科共通科目と臨地・臨床実習科目の履修を通して, 地域の保健・医療を担う専門職として必要な知識・スキルと問題解決力を身につけることができます。

#### ●保健師教育の受講者選抜制

保健師教育の充実を目的として, 平成29年度以降の看護学専攻入学生(3年次編入生については平成31年度以降入学生)に対し, 保健師養成に係る教育に受講者選抜制を導入しました。すなわち, 将来, 保健師として働く意思があるなど, 指定の要件を満たす3年生に選抜試験を実施し, 合格者にのみ公衆衛生看護学実習を受講できることとしています。意欲のある少人数の学生のみが受講することで, より質の高い効果的な実習を実施でき, 学生に実践的な能力の向上が期待できます。



## 学生委員会だより

### 学生委員会から保健学科学生のみなさんへのエール

学生委員長  
奥 田 紀久子

保健学科棟の周囲の木々が豊かな緑に色づく姿に, 新しい生命の息吹を感じます。学生のみなさんにとっても, 新たな未来に向かって大きく成長する時期だと思います。一生のうちでとても大切な時期にあるみなさんとともに過ごせる時間は, 私たち教職員にとってもかけがえのないものです。

学生委員会は徳島大学の学生のみなさんが, 悔いのない充実した生活を送れるよう, 教職員が一体となって応援するための組織です。部活動やサークル活動, 心身の健康管理, 経済的支援, 就職活動など, 学生生活全般にわたって支援を行います。また, 保健管理・総合相談センターや特別修学支援室など, 学生生活を支えるための様々な組織や制度を活用して, 学生生活をサポートします。時には社会や学内でのルール, マナーを守る

よう注意を促すこともありますが, 保健学科に在籍する全ての学生のみなさんが, 将来学生生活を振り返った時に, あの学生時代があったからこそ今の自分があると思えるように, 温かく支援していきたいと思っています。

みなさんはぜひ自分自身の可能性を信じて, 今しかできないことにチャレンジしてください。今, 置かれている環境の中で, 精一杯力を出し切ることが, 新しい出会いにつながり, さらに新たな道が切り開かれます。その過程には失敗もあれば, 答えが出ない迷いもあることでしょう。そんな時には周囲の友人や教職員に相談してみてください。きっと解決の糸口が見つかります。そして, これらすべての経験こそが, 将来みなさんが医療人として誰かの支えになるための原動力となるはずです。

## 新任教員紹介



看護学専攻  
学校保健学分野  
准教授

田中 祐子  
Yuko Tanaka



看護学専攻  
臨床腫瘍医療学分野  
助教

高橋 亜希  
Aki Takahashi



検査技術科学専攻  
生体機能解析学分野  
教授

遠藤 逸朗  
Itsuro Endo



検査技術科学専攻  
病理解析学分野  
助教

金井 麻衣  
Mai Kanai

## 国家試験合格状況

国家試験	看護師	保健師	助産師	診療放射線技師	臨床検査技師
徳島大学	98.5%	96.7%	100%	96.9%	94.1%
全 国	94.3%	94.5%	93.2%	96.0%	89.9%

注1) 表中の数値は合格率を示しています。

2) 徳島大学の合格率は平成28年度卒業生・修了生を対象としています。

## インフォメーション

オープンキャンパス 平成29年8月8日(火) 午後(全専攻)

大学説明会を実施します。

3年次編入学試験 平成29年8月18日(金) 実施

保健学科3年次編入生についての募集要項等の詳細については、以下までお問い合わせください。

〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15

徳島大学蔵本事務部医学部学務課第二教務係

Tel 088-633-9009



オープンキャンパス

オープンキャンパスと入学試験の最新情報は

<http://www.tokushima-u.ac.jp/med/admission> をご覧ください。

徳島大学医学部保健学科だより 第17号

平成29年6月発行

発行：徳島大学医学部保健学科

編集：広報委員会 大塚 秀樹, Rozzano Locsin,

千葉 進一, 井村 裕吉, 濱野 修一, 安藝 健作

保健学科だよりへのご意見・ご要望は、以下までお願いします。

〒770-8503

徳島市蔵本町3丁目18-15

徳島大学蔵本事務部医学部総務課総務係

電子メールアドレス：isysoumu1k@tokushima-u.ac.jp

保健学科ウェブ情報リンクページURL：

<http://portal2.medsci.tokushima-u.ac.jp/Plone>